

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

近代中国思想史論

著者	有田 和夫
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	文学
報告番号	乙第102号
学位授与年月日	1997-10-27
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004054/

この論文は、拙著《清末意識構造の研究》（1984年1月汲古書院刊）を基礎に、大島晃と共編した論文集《朱子学的思惟～中国思想史における伝統と革新～》（1990年2月汲古書院刊）所収の拙稿〈総論〉〈清末における士人意識〉を加え、更に補訂改編したものである。

第一章序論の第一節では、従来の中国思想研究の方法を批判し、小論の方法について述べた。即ち、従来の方法は、①革命史的方法・②自己投影（感情移入）の方法・③經学史的方法に大別される。①は現時点における革命的成果を絶対化し、それを説明するという方向で思想（史）を検討し、“反革命・非革命・不革命”的なものを否定的に扱うため、却って“革命的”なものの思想史的な意味が不明確になっている。②は対象そのものとそれを取り巻く歴史的社会的諸条件の詳細な検討なしに主観的に想定した人物像を確認するために資料を読みこむもので、評論ではあっても研究とは言い難い。③は經学的研究を西洋哲学風に装わせたもので、先秦以来儒家を中心とした中国思想の不変を前提とし西欧所産の哲学思想史の原理が無前提に適用される。この点では①②も同様で、宋代以後の社会構造の大転換にともなう思想の質的変化を見落とし、或いは史的唯物論の機械的適用によって、“伝統的”“封建的”などの表現の濫用を惹き起こしている。そこで、小論では、思想史の形成は、歴史的一時期において社会的歴史的に条件付けられて過去 of 思想を受けとめた結果生ずる解釈のズレの積み重ねである、という立場に立って、歴史的一時期における思想の実像を確認し定着させるためには、何よりもその時期の意識状況と個々の意識との相互関係によって思想を産み出すメカニズム＝意識構造を検討する必要があると考え、これによって清末民国初年の思想を構造的に再構成することが可能になるとした。

第二節では、小論の構成と各章各論の主眼点について概説し、特に意識構造論的観点から、義和団以前と以後の状況の変化にともない論者たちのテーマが変化して行ったことを考慮に入れて、従来の“康梁派と革命派に近い譚嗣同”という革命史的ではあるが根拠を經学史的解釈に置いている観点を排して、〈康有為・譚嗣同〉と〈嚴復・梁啓超〉という形に区分し検討すべきだとした。即ち“変と通”と“適者優者”というテーマの変化を重視した検討である。

第二章～第四章までが本論である。

第二章第一節の（一）（二）²/_変変法運動期までの思想史的概要について述べ、第二節と第三節では、“変と通”というテーマの枠内で、古今東西の思想を動員して変革思想の体系化を試みた康有為と変革意識を尖鋭化させて行った譚嗣同とについて、その思想の質を論じ、第四節では、この時期の反変革思想の好例として『翼教叢編』を検討し、全体としてどのような意識状況の中でそれぞれの思想を展開させていったかを論じた。附論として、この時期における気論の諸相について述べ、さらに、譚嗣同の以太（エーテル）論を中国における唯物論“気論”として扱うことの非合理性を論じた。

第三章では、第一節で義和団以後の思想概況について述べ、第二節では嚴復を例として分裂→被淘汰という危機感の定式化と強力な専制への期待について論じ、第三節では、梁啓超の歴史段階に対応する政治体制の選択という適応のための方式について論じ、第四節では、改良派と革命派の変革の方法をめぐる論争の分析を通して、両者に共通する士人主導型の経世済民志向の存在を指摘し、第五節では、世界の最先端のものを取り入れることによって列強との差を早急に縮めたいとする願望の思想的表現の好例として、清末無政府主義運動を検討した。

第四章では、以上に検討してきた現状変革への志向を激発したバネとしての働きを担った士人意識について、その経世的側面と倫理的側面との両面から、梁啓超・譚嗣同・章炳麟・康有為及び反変革論者を事例として検討し、彼らのこの意識の根底に潜在する朱子学的思惟についても論及した。なお、士人意識とは、“経世済民”を自からの責務とする意識であるが、“修己治人”に見られるような倫理的自己完成を前提とする。この場合の士人は身分ではなく資格であり、宋代以後の一君万民体制を支える官僚群を構成する人々である。

第五章結論では、これまで義和団以前と以後とに分けて論じてきたものを総括し、各時期の意識状況を、a：日常的恒常的世界の崩壊（太平運動期→洋務運動期）、b：滅種に至る危機（洋務運動期→変法運動期）、c：たちおくれプラス分裂（変法運動期→革命運動期）、d：世界的平等権の希求（革命運動期→五四運動期）とし、これらの累層が次期へ影響しつつ、各時期の特色ある思想を産み出して行き、それらの思想と行動のバネの役割を担ったのが士人意識であると結論し、この士人意識は、その後は相貌を変えつつも、一君万民的体制の下で、“知識分子”“幹部”“領導”などという形で生き続けていると推論した。